

『脱原発・自然エネルギー218人詩集』 刊行の記者会見

二〇一二年七月二十五日（水）午後一時より

国際文化会館別館にて

コールサック社主催

本詩集は、福島原発事故によって人間の精神や魂が立ち枯れていくような状況に対して、言葉の本来的な自由奔放で根源的な力で、人間の内面の深層に届かせて人間の精神や魂を奮い立たせようと願った218人の詩人たちの詩篇である。

主な特長

1、福島原発事故以前に原発が将来的に悲劇的な事態を引き起こすと、原発の危険性を本質直観していた詩篇を一章に収録し、予知的な視点や歴史的な視点が根底にある。また事故後は事実を直視し、今後の未来がいかにあるべきという未来志向の視点で編集がされている。

2、日本人一九五人、海外詩人二十三人（アメリカ人、イギリス人、ドイツ人、スイス人、イタリア人、インド人、韓国人）の計二一八人の詩篇が収録されて十一章に分けて、原発が人間の心身や人間社会へ、地球の生きものたちへ、また地球環境そのものへ、どのような影響を百万年先まで与

えるかを様々な観点で記されている。

3、本詩集は、世界の人びとに読んでもらうために、日本語だけでなく英語版が合体されていて、福島原発の悲劇を人間からの視点で発信されており、福島原発事故の教訓を世界に発信する目的で編集されたものである。

記者会見の内容

1 編者の四人、鈴木比佐雄、若松丈太郎、佐相憲一たちの説明と鈴木文子の朗読

鈴木比佐雄…本詩集の企画・編集意図・世界に発信する意義など。

若松丈太郎…原発事故が収束しない現状で福島の人達はどういうな思いで声を発しているか。

佐相憲一…日本の現代の詩の世界についてと、いかに幅広い詩人たちが参加してくれたか、など。

鈴木文子の詩の朗読

2 翻訳者の二人、郡山直、結城文の話

218人集を翻訳し世界に発信することの今日的、未来的な意義を語ってもらう。

3 装丁デザイナーの杉山静香が装丁にこめた願いや考え方を語る。

4 記者たちとの質疑応答

本詩集の序文・帯文は、音楽家の坂本龍一氏にゲラを読んでもらい主旨に賛同頂き坂本氏の言葉を借りることが出来た。この推薦により多くの音楽家などの芸術家やその愛好者の方々の新たな芸術の創造に寄与できることを願っている。

本日お集まりの記者の皆様の本詩集の意義を多くの方々にご紹介頂ければ幸いである。

(以上、当日配布プログラムより趣旨)

鈴木比佐雄

本日は猛暑の中、駆けつけて頂いて、ありがとうございます。一年かけてこの『脱原発・自然エネルギー2118人詩集』を刊行させて頂いて、これを何とか世界に発信したいと思いついて、皆様に来て頂いて、この本の意義を説明させて頂こうと思っております。よろしくお願ひします。

この本をつくらうと思ったのは去年の八月なんですけれども、コールサック社は一年に一回こういう大掛かりなアンソロジーを制作してまして、二〇〇七年に『原爆詩一八一人集』の日



郡山直 佐相憲一 鈴木比佐雄 若松丈太郎 鈴木文子
(手前) 結城文

本語版と英語版をつくりまして、二〇〇八年にも『生活語詩二七六集山河編』というのをつくりました。二〇〇九年は『大空襲三一〇人詩集』というのをつくりました。二〇一〇年は『鎮魂詩四〇四人集』で、柿本人麻呂から始まって、アフガンイラクの死亡した人たちを悼むような詩まで、ですね。昨年は『命が危ない 311人詩集』ということで、今回のものともダブルですけれども、原発事故を含めた震災関係の詩もかなり入っています。実は二〇一〇年に『鎮魂詩四〇四人集』をつ

くった時に、翌年は、「命」をテーマにした詩集にするか、「脱原発」にするか、迷っていたんですけども、多くの戦死者を出した戦争の鎮魂というような詩集の後には、やはり「命」がいいのかなというところで、昨年これやって、「脱原発」は今年やった方がびつたりだな、と思っております。

コールサック社は二〇〇六年に株式会社として創立したんですけれども、実は一九八七年、二十五年前から詩誌「コールサック」というのを年三回つくってまして、宮沢賢治のような精神で詩を書いている人たちに参加してもらおうということと二十五年前やってきたんですけれども、そういう過程で『原爆詩一八一人集』をつくりたいなと思ひまして、出版社にしました。そのような意味では、「戦争と平和」ということをずっと考えてやってきた出版社です。

今回のこの詩集をつくる時に、一番根幹に考えたことは、戦後の世界において、日本がどうして平和国家になったかというと、やはり真剣に平和を考えたからではないかということとです。で、原発の問題を考えますと、地域の自然・人間を破壊する可能性がありますが、地域の社会を破壊する可能性もあるし、日本の根幹である非核三原則、平和国家の根幹を揺るがしてしまう恐れのある核兵器に転用できるといふ原発の技術なので、原爆の問題と原発の問題というのは切り離せないということは分かっていたんですけれども、「原子力の平和利用」ということでカモフラージュされて、ここまで行ってしまったと。

後から話される若松丈太郎さんは、福島原発ができた後、四十年間ずっと福島原発のことを語り続けてきたんですけれども、原発のもっている本質的な恐ろしさというものを詩人たちは感づいていたんですね。そういうことを書いてきた詩人も多いんですけれども、そういう予知的な詩を書いていた詩人の作品も掲載して、原発詩に関係する詩の歴史も明らかにしながら、福島原発事故以降の、さまざまな人間の感性を通じながら、詩

を通して考えてもらおうと思つてつくりました。

そんな意味では、原発の問題というのは、根本に科学技術の問題とか、平和国家という理念という問題とか、地域主権のことも原発をつくらせる貧しい県と豊かな県との差別の問題もあります。原発の問題というのは最も考えなくてはいけない問題ではないかなと、そう思ひまして、詩人たちが自由な観点で書いていますので、詩人の言葉を通して、多くの人が読んで価値あるものではないかなということは根本にありました。

そんな意味では、この『脱原発・自然エネルギー218人詩集』は、これまでとは、次元が違うと思つています。これはいままさに現実の問題だし、未来を切り拓いて行く、そういう本じゃないかなと思つています。世界に類のない本になるんじゃないかなと思ひます。

これだけの四基の原発が同時におかしくなつて、実際に放射性物質がどんどん出ていると思つて、正確な情報も伝わってきません。フクシマの経験を引き継ぎ、世界に伝えない限り、これからフクシマのような事故が世界中で必ず起こってくるんじゃないかと思ひます。それを食い止めたいなというような使命感を感じたんです。

『原爆詩一八一人集』の時は、日本語版と英語版を別につくりましたが、今回は日本語版・英語版を合体させることによつて、これを本当に世界の人に読んでもらいたいと思ひます。

日本人はハードの輸出はうまいんですけれども、日本人の平和思想とか人類のために考えていることとか、そういうソフトの面を海外に輸出するというのはあまりやっていないと思つて

です。本格的な文学書でそういうものを世界に発信するというのはあまりやってこなかったと思うので、この二一八人の力を結集して、何とか世界の心ある人々に届けたいと考えています。一つの本で記者会見なんて厚かましいんですけども、これを本場に世界に発信したいという気持ちになった時、一番いいのは記者の方々に集まって頂いて、何とか世に広めて頂きたいなど、そういうふうと考えております。

これは多くの詩人が賛同してくれないと絶対不可能なので、私と同じような思いの詩人が全国にたくさんいたということです。

そういうことで実現しましたが、詳しいことは解説にも書いてありますので、読んで頂ければと思います。

この詩集を、脱原発や自然エネルギーにしたいという思いの人たちに読んでほしいということもあるんですけども、これ



鈴木比佐雄

は詩の言葉、芸術的な言葉と思いますので、音楽家の坂本龍一さんに序文と帯文を頂きました。彼も脱原発ということをはっきりおっしゃっていますし、彼の音楽が深い言葉のように前から思っていましたので、彼のような音楽家に推薦してもらって、多くの芸術家や芸術愛好家の方々にもこの詩集を読んでもらって、刺戟にもして頂いて、多くの芸術作品をつくってもらいたいなという希望があります。それは十分可能じゃないかなと思います。坂本さんには、脱原発の交響曲をつくってもらいたいというような希望もあります。

野田首相の「国民のために原発を再稼働する」というような発言に見られるように、原発にとらわれている人々に、本当の人間の声を聞かせるためにも、「経済が重要なんだ」と原発を言う凝り固まった人たちにも、もつともつと心豊かになつてもらうためにも読んでほしいと思います。さまざまな立場の人にこれを読んで頂いて、もう一度原点に立ち返ってもらいたいなと、そういう願いをこめてつくりました。

次は、もう一人解説を書いて頂いた若松丈太郎さんに語ってもらおうと思います。若松丈太郎さんは昨年五月上旬に『福島原発難民』を出されたんですけども、南相馬市で国語の先生をずっとやられていて、原発が問題だと四十年以上ずっと検証されてきました。全国に詩人は何千人といえますけれども、これほど徹底してやっていたのは若松さんしかいません。チェルノブイリにも行かれて、南相馬市を含めて福島がチェルノブイリのようになってしまうだろうと予言していた詩人です。そんな

意味でも、詩の中にある予知能力というものを体現されている若松さんを、福島にいる百名くらいの詩人たちも尊敬して、もっと若松さんの言うことを聞くべきだったということも私も直接聞きました。我々の脱原発の詩のリーダーですので、編者になってもいい、解説も書いてもらいました。

これから、『福島原発難民』に続いて『福島原発棄民』という若松さんの本も出ます。

実は若松さんはお体も非常に疲れていまして、今日も体調が悪いということであええ状況だったのを、あえて来ていただきまして、時間も一時間ちょっとしか居られないということでは、若松さん、お話し下さい。

若松丈太郎

今紹介いただきました若松です。ご紹介の中にもありましたけれども、福島県の南相馬市というところに住んでおります。住み始めたのが一九六二年だったと思いますので、ちょうど五十年ということになります。一九六〇年代のはじめというのは、原発の建設が、土地の買収とか、用地の設置とかがあって、確か六七七年頃に一号炉の建設が始まっているんです。一号炉が出来上がったのが一九七一年。そういう原発の最初の段階から、そばにあるものと意識して、暮らしてきました。

私が十歳の時、一九四五年ですが、戦争が終わります。広島や長崎に原爆が落とされています。その同じ核を使って電気を

つくるのだと言っていますが、なんであの辺鄙なところに建設しなくちゃいけないのか、長い距離の送電線がなくてすむから東京のど真ん中につくれば一番いいんじゃないかと思うんですけど、たとえば、常磐線が海岸を走っているのですが、そこからも見えないような海岸の山かげにつくっているんですね。これは、最初の段階から建設側は原発の危険性というものを認識していて、過疎地につくるんだと、周辺は人口の希薄な所につくるんだと、人口の密集した所から離れた所につくるんだと、もう最初の段階からこういう方針だったので、そういうなんかこう、怪しげなものが最初からありまして、いろいろ勉強したりしてきた中で、文章を書いたり、詩を書いたりしてきたわけです。

一号炉が稼働し始めた一九七一年に、下北半島には、原子力船「むつ」が動けなくなって大湊港に係留されました。下



若松丈太郎

北半島に原発関連の施設がつくられる話が出てきた時期です。下北半島の景観、自然環境と、福島原発が位置する所というのは、ひどく共通するものがあって、第一次産業体も成立しにくいような過疎地、あまり土地の肥沃でない所、そういった所が狙いうちされて、原発の建設が行われました。

大飯も行ったことがあって、神戸の震災の二年後ですけども、神戸を見た後、大飯も見てきました。あれだって、半島の山に囲まれた狭い所につくられていますね。一種の差別と言ってもいいのかなと思っただんですけども、そういった状況が事故以前にあって、事故が起きた後も、むしろいつそう深刻に行われていると思います。

この詩集の中に、水俣の人たちを撮ったカメラマンのユージン・スミスさんの奥さんのアイリーン・美緒子・スミスさんが福島原発事故と水俣病の共通性を挙げたのを詩に引用した作品がありました(九九ページ、鈴木悦子「プロテスター」……編集部注)。水俣にしろ、いろんな公害にしろ、いまの沖縄の問題とか、そういったものをあわせて共通するものがあるんだと思います。

私がショックだったのは、やはりチェルノブイリの事故です。チェルノブイリの場合ですと、三十キロ圏の人たちを避難させましたが、三十キロと言いますと、私の住んでいるところは福島第一原発から二十五キロですから、ちょうど入っちゃうんですね。もし福島第一原発で事故でも起きたら、私たちはみんなチェルノブイリの人たちと同じように、自分の住んでいる所を捨てて、本当に出なさいいけないのか、と考えました。それで

「神隠しされた街」を書いたんですけども、自分として決して予言するために書いたつもりはありません。むしろ、現実と重ね合わせれば、こういうことになるのかという心配です。心配を書いたというふうに記憶しているんですけども、それが現実になってみると、あの時思った以上に現実の方が厳しいという意識を今私はもっています。

「原発事故」と言いますが、本当は「事故」じゃないんだと思うんです。「事故」っていうと、たとえば、交通事故で死者何人、負傷者何人が出たとか、よく言いますよね。今これからあとの原発政策をどうするかという意見聴取会をやっていますが、その中で電力会社の社員が「原発事故があったけれども、人は一人も死んでいない」と言っているんですよ。ふざけんな、と私は思っています。仮に直接死んだ人がいなかったとしても、間接的に死んでいる人がたくさんいる。たとえば、最近の報道ですと、双葉病院の患者たちが搬送される途中でたくさん亡くなっています。それから、私知っている範囲でも自殺者が何人かいます。透析をやっていた人が透析できなくなつて亡くなった人がいますし、言語障害をおこしている人もいます。私の周りのこうした人々をみるにつけ、単に「事故」と言つて、死者何人、負傷者何人ということでは済まされないものがあると思うのです。ですから、私は「原発事故」とは言わないんです。「核災」という言葉を私は使うことにしています。「核災」って中国語なんだそうです。「核」による事故を「核災」と言います。「被災地」と言うよりは、「核災地」と言うべきだと考えています。

私はこの原発問題は言葉の問題だと思っています。

事故が起きた後、いろんな発言がありました。たとえば、「想定外だ」という言い方をしました。「想定外」のことがあってこんな事故になっちゃったと。「想定外」ってプロの使う言葉じゃないんじゃないかなと思うんですね。プロであるならば、専門家であるならば、「想定外」のことが起きないようになさなきゃいけません。そこところがすっぽり抜けていて、平気で「想定外」と言っている。あるいは、官房長官がなんとか発言しましたけれども、「ただちに人体に深刻な影響を与える数値ではない」という言い方をしますね。「ただちに」与えなくとも、これから後の長い時間の中で深刻な影響を与えるかもしれない、ということがその中に隠されているのだとすれば、きちんとその発言の中味を批判しなければいけないだろうと思うんです。実際に、たとえば、「警戒区域」という言葉がありました。トが、「ただちに人体に影響を与える数値ではない」にしても、安心して下さい、とは、言えない数値なのです。

それから、たとえば、「警戒区域」という言葉がありました。二十キロ圏が「警戒区域」とされたわけですけど、人がみんな出て行かなければいけないところがどうして「避難区域」じゃないのか。これは、住民を主体に考えていないということですよ。住民は避難させておいて、体制側がですね、その中に泥棒が入って来たりしないように「警戒」すべき区域という意味なのです。これは住民主体じゃないですね。為政者が主体になっていて、そういう発想が私たち住民の意識とは乖離している。

あるいは、「冷温停止状態を確認した」と言いました。「冷温停止を確認した」じゃないんですね。だいたい「冷温停止」なんて確認できていないんですから。まだまだ高熱を発しているわけですから。それをあたかも沈静化したかのようなことばであざむいているのです。

そういう中で、今度の大飯原発の再稼働も、きちんとこれまでのことを検証し、本当に大丈夫なのかという確認をしないままにすすめている。

今発電所の処理の段階で何ができていくのかというと、四号炉に燃料棒の貯蔵施設がありますね。たくさんある燃料棒を取り出す作業がようやく始まったのですが、使用済みの燃料棒はまだ一個も取り出していません。未使用の燃料棒をやっと一本取り出しただけです。これから後、何十年かかるか分かりません。その間にもし地震があつたり、津波があつたりしたらどうなるのでしょうか。写真をご覧になったと思いますが、原子炉の廃墟というのはものすごくひどいものですよ、あれをどうやって四十年で片付けられるのか、そのあいだに何が起るかわからない。

そんな中で、私たちは、そのそばで暮らしています。「そんな怖い所は逃げて、ほかの所へ行けばいいじゃないか」と言うかもしれないけれども、生活の根柢を奪われるって、大変なことですよ。自殺者が出たりしている。先が見えないからですね。核災はまだ終わっていない。

私は戦後の民主主義がどうもいい加減だったので、こんなものができたんじゃないかと、その結果のひずみが露呈したん

じゃないかと思えます。原発の問題についてたくさんの人が発言し、さらになお考えてもらうことが大事だと考えています。私の言いたいことは、このほかにも、この詩集の解説にも書いていますので、読んでいただければと思います。

記者との質疑応答

記者

チエルノブイリに行かれたのは住民の方とごいっしょではなかったかと思うんですけれども、それはどういったいきさつだったのでしょうか。あと、みなさんがどんなふうに感じていらっしゃるたかをおしえて下さい。

若松丈太郎

十八年前ですが、これはちょうど私が退職した年だったんです。退職してすぐの四月頃だったですかね、浪江町、いま全住民が避難していますけれども、浪江町で反原発の講演会がありまして、そこで顔見知りの方が声を掛けてきて、こういう計画があるからいっしょにどうだいて言うわけです。退職したばかりでしたし、チエルノブイリに行ってみたいと思っていたので、その場で「行きます」と。団長さんが県会議員で、十五人ほどのグループで、いわきの人がほとんどでした。相馬からは

私だけでした。通訳を下された方がモスクワ大学の医学部を卒業した方で、その関係で、キエフの医療機関にも行って、専門的なことの通訳をなさってくれたので、中味の濃い視察だったと思います。チエルノブイリももちろん行きましたけれども、プリピャチという捨てられたまちですね、そこにも行つたし、五十キロ圏の外につくられた新しいまちにも行きました。四号炉が壊れたんですけれども、三号炉が稼働していたんです、その運転のための労働者と家族が住むまちですね、スラブチチというまちなんですけれども、そこも見ました。労働者たちはですね、当時二週間交代で三十キロの中、チエルノブイリの避難区域の中に入って、労働して、また出てくると。バスも乗り継いで、外と中を分けてですね、管理していました。でも、お金がほしくて私たちのような見学者を入れていたようです。充実した旅だったと思います。その時の参加者全員で報告集を作りました。みんなはきちんとしたレポートを書いているんですが、私は詩の形で、連作ですけれども、書きました。

記者

戦後の民主主義がいい加減なのでこういうことになったというところをおっしゃいましたが、そこらへんのところをもう少しお聞きしたいと思います。

それと、最近、官邸デモなど人々が声を挙げる動きがありますが、それでも、どうぞ覧になっているのかもお聞かせ下さい。

若松丈太郎

私は戦争が終わった時に十歳だったんですが、大人たちがごろっと変わったのを見ています。戦争中と戦後で。こういう大人にはなりたくないとも心にも思いました。自分できちんと物事を考えて生きていきたいなど。

戦後、一応、日本国憲法がつくられて、民主主義を基本の柱にすえた形でスタートするんですけども、東西冷戦です、その中で朝鮮戦争が起きて、それをきっかけにアメリカの介入が起きました。たとえば、戦争放棄という条項が骨抜きにされて、それが後にどんどんエスカレートしていった、最初は「警察予備隊」という形で発足したものが現在の「自衛隊」になっただけ、実際には海外にも派兵されたりしてきました。そういう中で、自民党一党独裁が成立していった、一応今は民主党が政権をとっているけれども、本当のところを言うともう政党政治よりも官僚支配、官僚が力をもっちゃって、官僚の言いなりになってきたんですね。そういう中で、現在の野田政権がいろんなことを簡単にやっちゃってしまっている。たとえば原発の問題もそうだし、オスプレイの問題もそうだし。

私は、戦争責任をきちんと追及しなかったことが重大だったと思います。東京裁判でA級戦犯を死刑にしましたが、B級以下の戦犯をすぐ後に解放して赦しちゃってますよね。それから、憲法の第一条が「国民」じゃないんですね。そこらへんが怪しかったんじゃないかなと思います。そんなことの結果として

現在があるという気がしています。

私の年代は、就職した後が六十年安保だったんですね。私らの学生時代には勤務評定闘争というのがありましたけれども、あまり学生運動という空気じゃなかったんですね。そういう中で、六十年安保が起きて、集会やデモに私も行きました。でも、私には、徒党を組まないようにしようという意識がありました、それには金子光晴の「おつとせい」という詩の影響が強かったのです。あの詩には、向こうむきになっておつとせいが出てくるんですね。おつとせいがみんないっせいに同じ方向を見ているのですが、別の方向を見ているおつとせいがいます。そのおつとせいに私はなりたくない、と。だけれども、今の脱原発のああいう形の、自主的に個人の形で、組織されてじゃなくて参加したという、ああいう形でやるのはとてもいいことだと思っています。ぜひ、多くの方々に参加してもらいたいなと思っています。

鈴木比佐雄

本当にですね、私もそうだったんですけども、若松さんや私は早い段階から脱原発の詩を書いていまして、福島原発が三十年を経た頃も危ないなと思っていましたし、四十年を経た頃も本当に危ないなと思っていました。ですから、この原発事故が起きた時、私もそうだったんですけども、若松さんも、怒って怒って、もう怒りを通り越して、鬱状態にもなられたと

も聞いています。予測していたことがその通りになったわけでしょう。今も多分すごくお疲れになっていると思います。

若松さんは今日は体調のことと御用事でもう帰られますが、最後にもう一言だけ、お願いします。

若松丈太郎

先ほどお話しましたように、戦争責任をきちんと追及しなかったという事で戦後民主主義を考えたんですが、それと同じように考えていくと、この原発は「人災」だと思います。「企業災」であり、あるいはもしかしたら「国策」としてこれをすすめてきた国による災害だと思います。それには当然、責任者というのがあるわけですね。そこらへんをきちんと追及しないと、本当にこれは四十年で解決できる問題なのかどうか。

たとえば、ごみの問題ですね、南相馬市の小高区が今年四月に警戒区域を解除されて、環境が整備できてインフラが整えば、戻って来てもいいという区域に指定替えされたんです、部分的にね。ところが、実際にその後、小高区へ入ってみただけですが、津波が起こった、地震が起こった、そのままの状況が一年間ほったらかしにされていて、目の前に見えるんです。もう家の中はめちゃくちゃになっているし、湿気なんかありますからね。泥棒も入っていますね。そういう形でもうひどい状況なんです。じゃあ、家の中を片付けて、きれいにして、というふうなことをしたいと思っても、水道が出ません、下水道が使

えない、ガスも使えません。電気は通っていますけれども、夜は泊られません。そういう状況の中ですから、ごみを置く場所がないんです。仮置き場さえない。外には出せない。これではとても復旧がすすみません。それから、田んぼや畑はもう草ぼうぼうです。耕作禁止ですからね。漁業もできないでしょう。生活できる場所じゃない。子どもたちがほとんど今いません。福島県の中通りの方、福島や郡山など大きな都市の方でも、放射線量が実は私たちの所よりも高いんです。この問題も言いたいんです。

どうなんでしょう、先が見えません。

私にも孫が二人いまして、一人は高卒くらいで、一人は三歳くらいかな。高卒ぐらいの孫は来てもいいけれど、三歳ぐらいの孫には来なくていいと、言っております。

そんなような状況がまだ今も続いています。こんな感じで、原発とはもう五十年の悪いつきあいです。

今日はありがとうございました。

鈴木比佐雄

次にですね、この本の編者の一人の佐相憲一さんの方から、この本に参加してくれたさまざまな詩人について話してもらいたいと思います。

佐相憲一

よろしくお願いいたします。私は昨年のアンソロジー『命が危ない 311人詩集』から、今回も編者をさせて頂きました佐相と申します。

今回、全国からたくさん詩が集まってきました、その全部を一番早く読む役割をしましたので、皆さんの熱意が早い段階から伝わってきました。ここには全国からさまざまな世代の詩人が参加しています。

記者さんは、日本の場合、日頃本屋に詩関係が少ないこともあって、詩人と言っても驚くほどご存じない方々が多いですね。詩のことを知りたいんだけれども分からないから、詩の世界ってどうなっているんですかという質問を私も時々受けるんですけれども、たとえば、今回のこの『脱原発・自然エネルギー218人詩集』もそうですが、過去のアンソロジー詩集などを読んで頂くと、こんなに全国に詩を書く人がいるのかと驚かれる方も多いんですね。コールサックは毎年何らかの、平和に関する、あるいは社会に関するアンソロジーを出してきたんですけれども、それぞれに参加している人の作品を全部読んで頂くと、実に多くの人が全国で詩を書いているんだなと、そのことにまず発見があるんじゃないかなと思います。

それで、何で日本の場合は詩が本屋にあまりないのかという問題は、さまざまな要因がありまして、今日はそれが主題じゃないのでお話ししませんけれども、今日のことに関係することの一つだけ申し上げるなら、日本では戦前、著名な詩人たちの



佐相憲一

ほとんどが時の権力による圧力につぶされてしまっていて、アジアなどへの日本の侵略戦争に加担してしまっただけということがあります。多くの詩人が、日の丸万歳、お国のために兵隊になっただけで死んでいってしまったんですね。それが本意ではなかった人もいたようですから、それを今ぐちゃぐちゃ蒸し返すことはしません。また命がけで抵抗詩を書いた人もいました。しかし、ほとんどの著名な詩人、詩でめしを食っていたような人たちが侵略戦争に加担してしまっただけということ、ここに日本の特殊性があります。韓国やフランスですと、詩人たちは植民地支配と闘い、レジスタンスを闘い、権力側ではなく国民・市民の側に立っていましたから、戦後社会の中で詩人がとても尊敬されました。それをベースに、国民の一般的な暮らしの中に、詩というものが大切なものとして根づきました。

そして、それを反省して再出発したのが日本の戦後詩でした。ですから、戦後の日本の詩の世界は逆に、反骨精神が大切にされました。社会的な詩を書く人がたくさん出てきました。

でも、その後のさまざまな要因が複雑に作用して、今この世の中のメディアに出ているような詩の世界と、実際に私どもも長くこの詩の世界に関わってきたものから見る本当の現代の詩の世界には、大きなギャップがありまして、一応、全国団体でも各地の団体でも、公的な詩の大きな団体がたくさんありますが、そこに反映されている、あるいは無所属の方も含めて生き生きと日々詩を書き発表している、実際の現代のこの国の詩人たちのほとんどはメディアなどには出ていませんので、記者さんたちも知らないと思います。日本の実際の、世界にも通用する詩を書いている人たちは、その人たちなのです。

私は特に強調したいんですけども、この詩集を読んで頂くと、みなさんの暮らしの観点でも共感する詩が多いと思うのですが、それはなぜかと言うと、戦前のエライ詩人たちと違って、この書き手たちには生活があつて、仕事があつて、詩の世界をやりながら、日々市民の一人として生きています。企業労働者もいれば、学校の先生や学者もいれば、主婦もいれば、学生もいれば、退職者もいれば、障害者もいれば、公務員もいれば、出版業もいれば、商売人もいれば、失業者もいれば、家事手伝いもいれば、放浪者もいれば、と無数の市民の一人なのです。ですから、実際に働いたり暮らしたりして税金を払って主権者として生きてきた社会層の人が、詩人として詩の世界で頑張っているということなんです。

そういうところに日本の現代詩のリアルな実感の素晴らしさがあることを強調したいと思います。一部のわけのわからない記号論的な閉鎖的難解詩が現代詩の主流であるかのようなまやかしに、記者さんたちの人間を見る鋭い眼がごまかされないことを信じています。

こういう詩の世界は日本ではなかなかメディアとつながることがないので、あまり知られていないのですが、私たち現代の詩の世界が、いかに早くから原爆の詩を書き、戦争と平和を書き、現代の社会問題を書き、心の問題を書き、命を書き、そして原発を書いてきたか、ということですよ。

九・一一の時も、日本の詩人たちはいち早く反応しました。イラク戦争反対、九条平和などの心で、それもスローガンのような詩じゃなくて、さまざまな手法の詩人が作品でも発言でも行動でも声を挙げました。現代の詩人たちは市民生活において日頃大変忙しい日常を過ごしているながら、日常に埋没せず、詩文学の場を通して社会現実をしつかりと見つめているという方々が多数です。

まずは、今回のこの『脱原発・自然エネルギー218人詩集』を多くの方々に手にとつて頂いて、心に響けばいいなと願っております。

今回、若い方から大ベテランまで、さまざまな方々が参加されていますが、公募の段階では以前よりもテーマがかたく感じられてしまつて、趣旨は大賛成、でも自分にはそういう詩はなかなか書けないという詩人もたくさんおられました。ですから、今回218人となっていますが、実はその背後にはその十倍く

らしいの同じ志の詩人たちがいて、自分自身は作品は出せなかつたけれど、この脱原発の趣旨に賛同しているということを強調しておきたいと思います。

それから、今回の収録作品には、先ほどから出されていますような先駆的な、原発そのものをリアルに書いた詩があると同様に、原発問題というのは原発のみに限らず、これからの人間の生き方の根幹に関わる問題ですから、文明そのものを見つめて、これからの人間の生き方、これからの世界や地球のあり方、といった広い視野のものをやさしい言葉で表現した作品群などもあります。暗喩を駆使して深淵を見つめるものもあれば、ストリートなメッセージのものもあります。

ですから、ここに集っている詩人の方々は、日頃いつもいっしよに徒党を組んでいる方々ではありません。本当にさまざまな考え方の、さまざまな詩の傾向の、全国各地でそれぞれ地道に詩を書いている方々が、脱原発・自然エネルギーという点で一致して、作品を寄せてくれたわけです。日本の現代の詩の世界においても、新鮮なことだと思います。

私たちが誇りに思っているこの本を広く多くの人たちに届けたいと思います。この本を通じて、現代の詩人が広く一般の方々と共にこの問題を考える、そういうきっかけになればいいと思います。

記者のみなさんには、日頃なかなか接することのない本当の現代詩の世界も見て頂き、この大変な時代状況を今後ごいっしよに考えていけるなら光栄です。今日は暑い中を、またお忙しい中をありがとうございました。

鈴木比佐雄

今日は、もう一人、編者の方が来て下さいまして、鈴木文字さんをご紹介します。彼女も原発の予言的な詩を書いていました。実は鈴木文字さんは朗読の名手です。今日は、ここでその詩を朗読して頂きます。一九八七年に書かれました「夏を送る夜に——原発ジブシー逝く——」という詩で、これはこれまでさまざまなところで朗読された作品です。

鈴木文字

この詩の背景になりましたのは、樋口健二さんという写真家がいらっしゃいますが、その第一写真集にこの原発労働者の写真が大きく出ていたんですけれども、私は昔、労働組合運動の代議員を務めまして、その頃、原発反対の運動にも少し加わりました。柏崎原発や東海原発に行ったりしたんですけれども、この詩を書いたのは、どうしても許せない、書かなければいけないという気持ちでした。三十年くらい前に書いたかなと思っていたんですけれども、よくよく調べてみますと、二十五年まえに発表したことが分かりました。

その後、私は会社を定年になって組合からも離れて、その後どうしてきたかと言いますと、やはり安全神話に乗っかってきた一人として、忸怩たる思いを今もしております。

今年、三・一一の慰霊祭に南相馬まで行ってきました。どう



鈴木文子

しても自分が許せないというような気持ちがありまして、そこで見たもの、聞いたものは、映像では分からない、実際に自分で見なければダメなんだということがよく分かりました。

この『脱原発・自然エネルギー1218人詩集』が出たのをきっかけにして、これからは私はずっと作品を書いていかなければいけないと思っております。

「あとがき」にも書きましたけれども、やっぱり遠く離れていると、毎日誰でも生活しているわけですから、薄れるわけですね。「あんなことがあったんだな」ではなくて、今も大変なんだということを、原発のある所だけじゃなくて、日本全体が原発をなくさなくてはいけない、それを私たちがいつでも話したり、作品に書いたりしていかなければいけないと今は思っています。

(詩朗読)

夏を送る夜に —— 原発ジブシー逝く ——

いいやつだったなあ。
ああ、いいやつだった。
それにしてものんべえだったなあ。
のむしかなかったのよ。

百姓やめて何年んなる。
田畑いんげんくさぼうぼうんなって五年よ。

漁に出なくなつて三年半。
不漁つづきで、借金かかえて、
どうにもなんなかった。

そんな時、
請負いの親方がきたつてわけさ。
十分か二十分働いて、

たった三分で一日の手間もらったこともある。
命がけで魚とつたもんにとつちやあ、
原発さまさまだった。

百姓だつておんなじよ。
なんにも知らねで、
ゴムのカッパ着て、長グツはいて、
宇宙人みてなマスクつけて、

マスクは苦しいからはずして仕事した。
いつだったか

炉の床にこぼれた水ふきとってたら、
胸に下げたアラム・メーターが、
ビービー鳴ってうるせえのなんの。
そんなの無視して作業やったけどな。

そらあそうだ。

メーターがパンクしたって
やめられるもんじゃねえ。

上のせ手当ほしかつたもんな。

あしたっから仕事もらえなくなったら、
そのことばっかり考えて。

仕事終つと

一二〇ミリレムって

被曝基準*どおりに書いたもんだ。

二〇〇ミリレムこえると、

メーターの針が切れるそうだ。

放射能は、

見えるわけじゃなし 臭くもなし。

仕事してつとき、

どこかが痛くなることもなし、
恐ろしいなんて信じられねえんだな。

覚えてるか あの黒人のこと。

でっかい体で真っ白い歯で、
コニチワ。

日本語はコニチワとサヨナラだけで。

体でリズムとりながらペラペラしゃべって、

人なつこい気の下さそうな青年だった。

両手をいっぱいひろげて、

首をちょこんと曲げて、

サヨナラ。

ひび割れた炉の中で、

一〇〇〇ミリレムもあびたつて話だが、

無事に国へ帰れたらうか――。

若くて肌が光ってたから、

毒なんかしみなかつただらうよ。

きつと そうしみなかつた。

いいやつだったなあ。

ああ。

もうすぐおれたちも。

まあ 一パイいこうか。

ああ……

*レムは放射線量の単位（現在はシーベルト）。法律では五〇〇ミリレムと決まっているが、これはとんでもない主張。

鈴木比佐雄

次は翻訳者の方々です。今回七名の翻訳者の方々を翻訳して下さったんですが、その中心的な役割をして下さった郡山直さんと、結城文さんが来てくださいました。お二人には『原爆詩一八一人集』の時からお世話になっています。

郡山直さんは東洋大学の名誉教授でいらっしゃって、戦後間もない頃からアメリカに留学されて、アメリカに相当長くおられました。英文学者であると同時にバイリンガル詩人なんですね。つまり、英語で直接詩を書く方です。今回の翻訳で一番大切なのは、日本語の詩のリズムをいかに英語のリズムに翻訳するかということで、ただ語学ができるだけじゃだめなんです。英語の詩を直接書くくらいの方じゃないとできないのです。その最も中心的な人物が郡山直さんで、そういうことをずっとやられています。

結城文さんはアメリカに御主人と仕事の関係で行かれてアメリカに住まわれていましたし、詩人で英語短歌の実践者で、そういう実作者であり翻訳者でもある方です。

郡山直

郡山です。翻訳者は七名ですけれども、その中の矢口以文さんという北海道にお住まいの方についてちょっとご紹介したいと思います。彼のあとがきから読みます。

「長く書いてきた詩人の作品もあったし、書き始めたばかりの詩人の作品もあった。ある名前の知られた詩人がどこかで原発関係の作品は読むに堪えない、と書いたようだが、この国は勿論、人類全体が減びるかもしれない重大な事件に直面して、何も感ぜず、何も言わず、芸術的な表現だけを追求しているとするならば、それは私には理解しがたいことだ。」
こう、矢口さんは書いています。私も全く同じような気持ちです。

今度は私の「あとがき」から読ませてもらいます。

「私はコールサック社からこの『脱原発・自然エネルギー218人詩集』翻訳者の一人になってくれ、という依頼があったとき、『脱原発』のメッセー지를世界中に発信したい、と思っ



郡山 直

で、私にとって翻訳はそう簡単な作業ではない。異なった遺伝子、語彙、感性、年齢、人生経験を持った他人の詩を英語に翻訳することが簡単であるはずがない。」

とまあ、そう書きました。

矢口さんは日本のバイリンガル詩人の中では第一人者で、ここにアメリカの出版社から出版された彼のとてもいい詩集がありますので、ちよつと回してみてください。

私は日本の現代詩を翻訳していますが、もうずっと前にニューメキシコ大学に留学した時の先生との共訳で出したものがここにあるので、これも回してみてください。

私の英語の詩がアメリカの教科書出版社からの教科書に載っているリストもあります。

それで、私は今回の「あとがき」にこうも書いています。

「私はこのアンソロジーの英訳が世界中の教科書出版社の編集部注目ひき、学校教科書の中に収録されることを期待したい。あるいはこの英訳詩のなかから選んだ詩を集めて新しいアンソロジーを編集してくれたらと思う。英語圏以外の国々の出版社がこれらの英訳詩を自国語に翻訳してアンソロジーを編纂してくれることも期待したい。」

私は私の詩を載せてくれたアメリカの出版社にこの本を送って手紙を書く予定です。

また、私は「あとがき」で次のようにも述べました。

「私は一九四一年に英語を勉強し始めてからもう約七十年になるが所詮英語は私にとって外国語だ。生まれ故郷の奄美の喜界島言葉を日本語に直すのは簡単だが、日本語を英語に直すの

は簡単ではなく、時間もかかるし、精力も要るし、技術も必要だ。日本語の詩を英語の詩に変身させることは困難な作業ではあるが、面白い作業でもある。机の左側に置いて、左手の人差し指でたどっている日本語の詩が英語の詩に変身して、目の前に現れて来るのだ。イメージが鮮やかで、意味が分かり易くて、しかも優れた内容がある詩を訳しあげて、眺めることは、極めて嬉しい経験だ。」

結城文

結城文と申します。夫が東芝に勤めた人なんですけれども、一九七〇年代に東芝がアメリカに二つの現地法人の会社をつくりまして、東の方は軽電、テレビとか洗濯機とかそういう関係で、私どものいた西海岸の方は重電ですね。で、水力発電をそこに設置するということになり、メンテナンスのために技術者が要るということで、行っていました。五年くらい住んでおりましたけれども、日本に戻ってまいりまして、何年くらいかは忘れてしまったのですけれども、横須賀に「日本ニュークリアフュエル」という会社をつくりましたね。その時は、日立と東芝、でしたか、日本の家電でいろいろ競争している会社が仲良くいっしょに入って、原発の核燃料の「平和利用」ということで、一時出向していたことがあります。

それが皮肉なことに、後に私が、この脱原発の本の翻訳をすることにになりました。皮肉な運命だなと思いました。

私は三十四、五篇の詩を翻訳したんですけれども、その中に、高知県四万十市の山本衛さんの詩がありました。四万十市はやはり過疎地で、清流があります。まず、水力発電のお話がありました。でも、四万十の人間はそれを拒否したんです。清流のお魚を日々食べたいと。そういうお金もいらないと。それで、日本中の人から笑われたんだと。そして、今度は海の方にも、やはり過疎地ですので、お誘いが来しました。それは原発のお誘いだったんでしょう。でも、海の村の人もそれを拒否したと。それで有名になったと。そういう詩がありまして、私は原発を受け入れた福島の運命、あそこの過疎の村の人たちの運命ですね、それと、四万十の人たちの運命、つまり全国各地津々浦々の過疎地の、原発を受け入れた所と受け入れなかった所の運命は、対照的じゃないかと思うんです。

昨日テレビを見ましたら、国と国会と民間との事故調査委員会があつて、上から見る側と、市民の間から見ると、同じものを見ているようで、違つて見えると、私も納得したんですけれども、その時に映像で流れた、避難を強いられた人が着の身着のまま出てくるというのがありました。原発で直接死んだのではないけれども、介護施設などの施設にいる方々が八百名くらい、搬送先にそれだけの施設がなくて死んだとか、そういう事態があることです。ふるさとに帰れない、生活の基盤があつた所に戻れない、日本国でありながら、そこはもう廃墟になつちやつているのです。

私は東電という会社には非常に怒りを覚えます。もうひとつは、危機管理の甘さと言いますか、それまでに時間があつたの

にもかかわらず、当事者の方々がマニュアルというものも熟知していなかったということなんです。冷やすべきものも手動で止めちやつてメルトダウンしたなど、人災だということが強調されています。

私は翻訳を原爆詩からもやりましたけれども、これも英語に訳しておけば、世界のあらゆる国で今度は英語からそれぞれの言語に翻訳される可能性があるかと思ひます。

鈴木比佐雄

ありがとうございます。

最後に、この本の装丁を担当した杉山静香さんから、どうしてこのような装丁になったのかなど、そのあたりの感じ方とか



結城 文

考え方を話してもらいます。

杉山静香

コールサツク社の杉山です。本日はお暑い中をありがとうございます。
装丁に関して

とのことですが、この本は参加した頂いた218人の方々ひとりひとりが主役の本ですので、装丁に関しては簡単にお話しさせていただきます。
頂きたいと思っています。

まず現代の社会に発していくという観点から文字をメインにし、社会的な要素を持つ本であることを強調し



杉山静香

ました。自然エネルギーの持つクリーンなイメージを見返しな
ど中の紙で表現しています。とんぼや稲といったイラストは弊
社の鈴木と打ち合わせ、原発によって失われてしまう里山や故
郷の温かさを表現しています。
タイトルの文字部分には自然エネルギーの中でも主要な火力、
風力、水力、地力を連想させる色を使っています。シンブルに
まとめることで普遍的な本に仕上げ、広く世に広まっていつて
ほしいと思います。以上です。

鈴木比佐雄

ということ、今回はどちらかという未来志向で装丁をや
らさせてもらいました。脱原発というはどうしてもあの福島
の爆発したイメージがありますが、それを越えて、自然を再生さ
せていこうというイメージでつくられたと思います。

坂本龍一さんに序文・帯文をお願いしたというのは、日本人
の中でさまざまな候補があったんですけど、英語版のこ
とを考えると、日本で原発のことに発言している人々では
どうも物足りなくて、その時に坂本龍一さんが浮かびました。
ニューヨークの英語版のホームページを見たんですけども、
そこにこの言葉がありました、これこそ我々のこの本を世界に
発信する手助けをしてくれる言葉だなあと、坂本さんに長文の
メールを打たせて頂いて、ゲラも読んでもらって、私の解説も
読んでくださいますと、お願いしました。それからしばらく

経ったら、OKの返事が来ました。コマージュルベースじゃなくて、我々と考え方、感じ方が非常に近いかただと実感しました。坂本さん以外は考えられないという感じでした。お返事を待ってよかったなど。そういうことで、坂本さんを通して、この本が芸術家たちにひろまってくれるんじゃないかなと思います。この中の詩を誰かが作曲してくれたり、自然を大切にするような活動をしてほしいなと思って、こういう形になりました。

以上です。

これを機に、記者の皆さんにも詩の世界にも親しんで頂きたいと思います。

本日は、どうもありがとうございました。

(撮影：武藤ゆかり)